

[講演要旨] 百井塘雨著「笈埃隋筆」に記された海嘯について

都司嘉宣¹・小田桐(白石)睦弥²・松岡祐也³・佐藤雅美⁴・今村文彦⁴

1 深田地質研究所, 2 花巻市博物館, 3 東北大学, 4 東北大災害科学国際研究所

京都の豪商・万屋の次男の百井塘雨(ももいとうう, ?-1792)は「笈埃随筆(きゅうあいずいひつ)」を遺している。これは、全国を旅した塘雨の体験または伝聞を記したものであるが、訪問の年月日が記されていない場合が多い。また、現在の写本では、百科辞書的に編集し直された体裁になっているため、記載は時間順になっていない。「予宝暦八寅の年回国の始に」とあるので、旅行の開始は宝暦8年(1758)である。また、天明の末年(1788年ころ)旅行を終了しているようだ。

この随筆の巻五の「海嘯」の項に石見国の津波の記事が載っている。以下、活字本を東北大学附属図書館蔵狩野文庫の写本には次のように書かれている。

「予石見国銀山領五井村といふより江津と云に出る、(中略)前に大川有、向ひの地なる門村といふに渡んとすれハ渡しの舟なく、人多く集りて騒ぎ罵る、何事にやと問に、老人答て我七十余にかゝるふしき成恐しき事ハ見もせず、又昔より聞伝えし事もなし。アレ／＼と沖を指さず、如何成事かと見てあれハ、遙の沖より大山の如く逆浪一同に押来る、彼潮州の湧濤、始皇築し万里の長城も、今爰に見る心地也」。

この文の「大川」は江ノ川と推定される。「門村」は河口東岸の加戸村(現江津市嘉戸町)であろう。

「スハ此所も忽ち打碎て、浪の底とやならんと驚き見るに、此地ハ山の尾崎なれハ、浜辺よりハ殊に高く、彼浪も山下迄は押来りし計りなれハ、思ひしより胸落付ぬ、然れとも浪ハ川口へ高々と押入ぬれハ、渡舟を初めとしてあらゆる舟ともハ、水上へ逆押にして五六町計り漕上ぬ、又川に浮ふ材木類も同しく一時に逆上る、斯して又其さしたる浪引て返る時は、海上遙に二三十町もや、忽ち平地と成しかハ、海底種々の奇岩大石頭れ見へ、或ハ汐に引残されたる魚の大小となくひらひらと鱗(ひれ)うちはためき、鰲(あわび)、榮螺(さざえ)様の物も夥しく見ゆ」。

つまり、川口から押し入ってきた波のため渡し船などは上流に押し上げられた。汐が引いたとき

は、海岸から2, 3km沖まで海底が顕れた。この文はどう見ても津波の描写である。この項を最後まで読んでおこう。

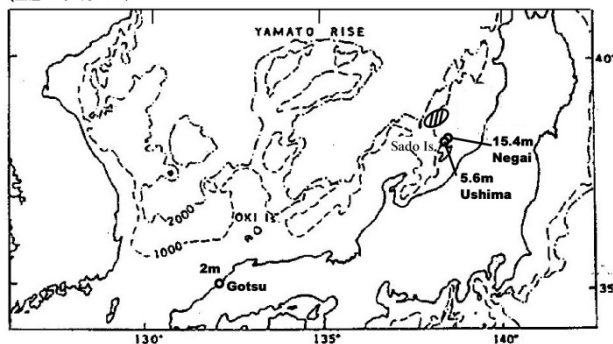
「扱人々の物語を聞ハ、此浪昼前より起て、既に三度也、若朝鮮の地に地震もや有て、津浪なむといふものにやと語りき、(中略)予も渡るき舟なく(中略)殊に九月中旬の月明らか成しかハ、又堤に出て見れハ、昼の如く高浪押来る、川口の両傍なる蛇籠、川岸の杭に物あたりぬる音の夜は猶もの凄く聞ゆ、」

地元の人々は、波は昼前から三度起きたという。この日は9月中旬の満月の頃だったので夜襲ってきた波も津波もよく見えた、という。

この津波は、既知のどの津波であろうか。(A)この出来事は、1758年から1788年の間である。(B)旧暦9月の満月(15日)前後の津波である。(C)これは日本海の津波である。この3条件を満たす津波は、佐渡北端付近の願(ねがい)村と鶴島の2地点で記録された宝暦12年(1762)9月15日、佐渡近海地震津波しかない。

なお、武者(1944)はこの津波は琉球八重山地震津波(1771)と推定した。塘雨と同時代人である橘南谿は寛保元年(1741)の渡島大島噴火津波と推定し、羽鳥ら(1977)はこの説に従ったが、年月日が記載に合わず不合理である。

1762-X-31
(宝暦12年9月15日)



謝辞：本研究は原子力規制庁からの委託業務「平成27年度原子力施設等防災対策等委託費(日本海沿岸の歴史津波記録の調査)事業」(代表：今村文彦)の成果の一部を取りまとめたものである。